



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

互いの心を響かせ合うことのよさを

1学期、合唱指導に来校して下さった声楽家、萩野久美子先生の指導を再度いただくことができた。音楽会の日の1週間前、体育館で練習をし始めた日だったと記憶している。

指導前後に、校長室でお話をしているときのこと「…みんなといっしょに歌うこと、とりわけ、となりでいっしょに歌っている人の声や息づかいを受けとめながら歌うということは、子どもたちにとって、とても大事なことだと思うのです。聞いてもらっている側の受けとめにも心を配るようにできれば、さらにいい。大人になったら、めったにできないことになってしまっていますよね。だから、子どもたちには、みんなで歌うことは、かけがえのない貴重な体験として大切にしてほしい。私も、子どもの頃は、あたりまえのように思っていたけど、そうじゃないんだと考えられるようになりました。」そして、さらにこんなことも付け足すようにして語ってくださった。「…ああ、今日はいい感じでうまく歌えたなあ、自分らしくとても気持ちよく歌えたなあ、そう思えたときほど、みんなの迷惑になっていたりして…。つまり、そういうときほど独りよがりになっていることが多いんです。作品全体を台無しにしてしまっていて、後から、やけに目立ちすぎていたなあと指摘され、おごりもあったのではと反省することもあるんです。」

つまり、それがたとえ独唱でも、演奏者、伴奏者、聞き手のみんなと合わせていくことが大切だということだった。合唱にしる、合奏にしる、その曲にこめられた思いやねうちといったものを受けとめ、これに導かれるようにして、お互いの心を響かせ合うことを大切にしなければならぬのだという。その話を聞きながら、これは周りのことを気遣いながら、自分を律し、互いがよりよく生きようとすることの大切さを説く話につながるのではないかと思えてきたのだ。ややもすると自分が基準となり、そこからずれていることを問題にして、どうのこうのと言うのではなく、互いに気遣い合いながら、しようとすることのよさを求めてかかわっていくことそのものが、幸せなのだということではないか…。こんなことを、合唱することや合奏することを通して、子どもたちに伝えてもらっているとうれしく感じていた。

いろいろな人にお世話になりながらでないと、プロの声楽家としての仕事も日々の生活もうまく立ち行かない、そんなふうを受けとめられるようになったと語る萩野先生ならではのことである。

校長 大林 道範